

夕焼け物語

小川未明

青空文庫

三人の娘らは、いずれもあまり富んでいる家の子供でなかつたのです。

ある春の末のことでありました。村にはお祭りがあつて、なかなかにぎやかでございました。

三人の娘らも、いつしよにうちつれてお宮の方へおまいりにゆきました。そうして、遊んでやがて日が暮れかかるものですから、三人は街道を歩いて家の方へと帰つてゆきました。

すると、あちらの浜辺の方から、一人のじいさんが一つの小さい

な屋台やたいをかついで、こつちに歩いてくるのに出あいました。それはよく毎年まいねん春から夏なつにかけて、この地方ちほうへどこからかやってくる、からくりを見せるみじいさんに似てにいました。

三人にんむすめの娘らはたがいに顔かおを見合みあつて、ひとつのぞいてみようかと相談そうだんいたしました。

「おじいさん、いくらで見せるの？」

と、娘むすめの一人ひとりがいいますと、じいさんはかついでいた屋台やたいを降おろして、笑わらつて、

「さあさあごらんなさい、お金あしは一銭せん。」

といいました。

三人にんは一人ひとりずつその屋台やたいの前まえに立たつて、小ちいさな穴あなをのぞいてみ

ました。すると、それには不思議な、ものすごい光景が動いて
 見ました。よくおばあさんや、おじいさんから話に聞いている人
 とかぶねひめとか、姫さまがさらわれて、白帆の張つてある船に乗せられて、
 暗い、荒海の中を鬼のような船頭に漕がれてゆくのでありま
 した。三人は、それを見終わつてしまふと、

「ああ、怖い。かわいそうに。」
 と、小さなため息をもらしていいました。

そのとき、じいさんは、三人の娘らを見て、笑つていましたが、
 「おまえさんがたは、いずれも正直な、おとなしい、しんせ
 つない子だから、私がいいものをあげよう。この紙になんでも、
 おまえさんがたの欲しいと思うものを書いて、夕焼けのした晩

方たに海うみへ流ながせば、手てに入いれることができる。」

といつて、じいさんは三枚まいの赤あかい小ちいさな紙かみきれを出だして、三人にんの娘むすめに渡わたしたのでありました。三人にんは、それを一枚まいずつもらつて帰かえりました。

三人にんの娘むすめらは、みんなの希望のぞみを、その赤あかい紙かみに書かきました。一人ひとりは、

「どうかきれいなくしと、いい指輪ゆびわをください。」
と書かきました。一人ひとりは、

「わたしにオルガンをください。」
と書かきました。もう一人ひとりの娘むすめは、髪かみの毛けの少すくない、ちぢれた子こで
ありました。その娘むすめは、いたつて性せい質しつの善ぜん良りな、情なさけの深ふか

い子こでありました。彼女かのじよは、死しんだ姉ねえさんのことを思おもわない日ひとてなかつたのであります。なんでも希望のぞみを書かけば、それを神かみさまが聞ききとどけてくださるといふものですから、娘むすめは、その赤あかい紙かみに、

「どうか姉ねえさんにあわしてください。」
と書かきました。

三人にんの娘むすめは、それぞれ自分じぶんらの望のぞみを書かいた紙かみを持もつて、ある夕ゆう焼やけの美うつくしい晚ばん方がたに浜はま辺べにまいりました。北きたの海うみは色いろが真まつ青さおで、それに夕ゆう焼やけの赤あかい色いろが血ちを流ながしたように彩いろどつて美うつくしさはたとえるものがなかつたのです。

三人にんはある岩いわの上うえに立たちまして、きれいなたいまい色いろの雲くもが空そら

に飛んでいきました。娘らは手に持つてゐる赤い紙に小さな石を包んで、それを波間めがけて投げました。やがて赤い紙は大海原の波の間に沈んでしまつて、見えなくなつたのであります。

三人は家へ歸つて、やがてその夜は床についてねむりました。そうして、明るる日の朝、目を開いてみますと、不思議にも、一人の娘のまくらもとは、みごとなくしと、光つた高価な指輪がありました。また一人の娘のまくらもとは、いいオルガンがありました。そうして、もう一人のちぢれ髪の娘のまくらもとは、赤いとこなつ草がありました。その娘は、不思議に思つて、その花を庭に植えました。そうして、朝晩、花に水をやつて、彼女はじつとその花の前にかがんで、その花に見入りました。す

ると、ありありと姉さんねえの面影おもかげが、その、日ひに輝かがいたところなつ
 の花弁はなびらの中なかに浮うき出でるのであります。

少女おとめは、声こえをあげんばかりに驚おどろき、かつ喜よろこびました。そして、
 いつでも姉さんねえを思おもい出だすと、彼女かのじよはその花はなの前まえにきて、じつ
 とながめたのであります。その姉さんねえの姿すがたは、ものをこそいわな
 いけれど、すこしも昔むかしのなつかしい面影おもかげに変わかりがなかつたの
 です。

少女おとめは、毎日まいにち、毎日まいにち、その花はなの前まえにきてすわっておりまし
 た。

またほかの二人の娘らは、一人は、美しいくしを頭に差し、きれいな指輪をはめています。一人は、いい音色のするオルガンを鳴らして歌をうたっています。ある日のこと、ちぢれ髪の少女は、友だちにあつてみますと、一人は、美しいくしと指輪を持つているし、一人は、いい音色のするオルガンを持つていますので、なんとなく、それを心のうちでうらやみました。

彼女の家に帰ると、独りで、花の前に立つて、

「ああ、わたしも、あんな指輪とオルガンが欲しいものだ。」
と、小さな声でいっただけであります。

このとき、どこからともなく、白い鳥が飛んできました。そし

て、不意に庭に咲いているとこなつの花をくわえて、どこへな
く飛んでいってしまいました。

少女は、この有り様を見て驚きました。そして、そこに泣きく
ずれました。

「ああ、わたしが悪かった、他のものなどをうらやんだものだから……神さまにたいしてすまないことをした。ああ、どうしたら
いいだろう。」

といって、地に伏してわめきました。けれど、もはやどうするこ
ともできません。

いくら姉さんにあいたいたって、もはや、とこなつの花はなか
ったのであります。もう二度と、その花の前に立って、なつかし

い姉ねえさんの顔かおを見みることができなかつたのです。

少女おとめはどうかして、あのところなつと同じおな花はなはどこかに咲さいて

いないかと思おもつて、毎まい日にちのように浜はま辺べを探さがして歩あるきました。浜は

辺まへにはいろいあおろな青しろや、白むらや、紫さきや、空そら色いろの花はななどがたくさん

に咲さいていました。けれどあの赤あかいとこなつと同じおな花はなは見みつか

りませんでした。少女おとめは姉ねえさんの面おも影かげを思おもい出だしては、恋こいしさ

のあまり泣なきました。そして、その明あくる日ひも、また彼かの女じよは浜は

辺まへに出でては、草くさ原はらの中なかを探さがして歩あるきました。

夕ゆう焼やけは幾いくたびとなく、海うみのかなたの空そらを染そめて沈しずみました。

少女おとめは岩いわ角かどに立たつて、涙なみだながらにそれをながめたのでありまし

た。

ある日のこと、彼女は、いつか赤い紙に石を包んで投げた岩の上^{うえ}にきて、海^{うみ}を望^{のぞ}みながら、神^{かみ}さまに手^てを合^あわせて、静^{しず}かに祈^{いの}りました。

「どうぞもう一度^ど、あのとこなつの花^{はな}をくださいまし。わたしがほかのものをうらやみしたのは悪^{わる}うございました。どうぞおゆるしてください。」

といました。

すると、夕^ゆ焼^やけのしたかなたの空^{そら}の方^{ほう}から、また白^{しろ}い一^わ羽^{とり}の鳥^{とり}が飛^とんできました。そして、少女^{おとめ}のすわっている頭^{あたま}の上^{うえ}にきて、くわえてきた一本^{ほん}のとこなつの花^{はな}を落^おとしました。少女^{おとめ}はそれを見^みて、夢^{ゆめ}かとばかり喜^{よろこ}んで、これ^{ひろ}を拾^{ひろ}いあげました。それは、い

つか庭にわに植うえておいた花はなとまつたく同じおなでありました。彼女かのじよは、その花はなに接吻せつぷんして神さまさまにお礼れいを申しました。しかし、その花はなには根ねがなかつたのであります。

少女おとめは、せつかく白い鳥しろとりがくわえてきてくれた花はなに根ねのないのを悲かなしみました。けれど、彼女かのじよはどうかして大事だいじにして、いつまでもその花はなを枯からさないようにしなければならぬと思おもつて、髪かみに差さして勇いさんで家うちに帰かえりました。すると、花はなはいつのまにやら、まつたくしおれていました。少女おとめはあまりの悲かなしさに、花はなを抱かかえて声こゑをあげて泣なきました。

みんなは、少女おとめが泣なくもので、どうしたのかと思おもつて入はいつてきてみてびつくりしました。

「まあ、どうしておまえさんは、産まれ変わったように髪がたくさんになって、しかも黒くなつて、美しくなつたのか。」
 といつて騒ぎました。

少女はこれを聞きますと、そんなら自分の少ない、ちぢれた赤い色の髪の毛が変わつたのだらうかと思つて、手を頭に上げて触れてみますと、なるほど、ふさふさとしてたくさんになつています。これは夢でないかと驚きまして、さつそく鏡の前にいつて映つた姿を見ますと、真つ黒なつやつやした髪の毛がたくさんになつて、そのうえ自分の顔ながら、見違えるように美しくなつていました。少女は、これを見ると、いままで泣いていた悲しみは忘れられて、思わずほほえんだのでありました。

日ひごろから、この娘むすめはおとなしい、情なさけ深ぶかい、優やさしい性せい質しつの
うえに、急きゆうにこのよううつくに美うつくしくなつたものですから、村むらの人ひと々びと
からはその後ごますますほめられ、愛あいされたということでもあります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

※表題は底本では、「夕焼《ゆうや》け物語《ものがたり》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夕焼け物語

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>